「戦争する国」の作られ方

―「先の大戦」から考える―

１２．８不戦のつどい@つくば

佐々木　啓（茨城大学）

本日のテーマ

① 長期にわたって国内外に甚大な被害をもたらした、「先の大戦」。あのような「戦争をする国」は、どのようにして、つくられたのか。

② 日本を再び「戦争する国」にしないためには・・・。

1、「先の大戦」とはなにか？

①多くの犠牲をもたらした戦争

- アジア各国で約2000万人／日本人で約310万人
- 「三光作戦」（焼光・殺光・搶光）、日本軍「慰安婦」など、アジア諸国への多くの**加害**。
- 他方で、日本の軍人戦死者230万人のうち140万人の死因が「**餓死**」。

②銃後の被害

１）空襲

本土では合計828の市町村で20万2975人の民間人が、通常爆撃や焼夷弾の投下、機銃掃射、艦砲射撃によって落命。

２）住民を巻き込んだ沖縄戦。

３）広島・長崎への原爆投下。

４）引揚げの過程での犠牲。

図 26　東亜共栄圏の図

要するに…

他国に侵略し、国内外で人間の生命や尊厳を蔑ろにした戦争。

③戦争の全体像

1931.9.18　柳条湖事件　満州事変

1937.7.7　盧溝橋事件　日中戦争

（1939.9.1　ドイツ軍のポーランド侵攻）

第二次世界大戦

1941.12.8　真珠湾攻撃／マレー半島上陸作戦

アジア・太平洋戦争

1945.8.14　ポツダム宣言受諾（敗戦）

VS 中

↓

VS 連合国

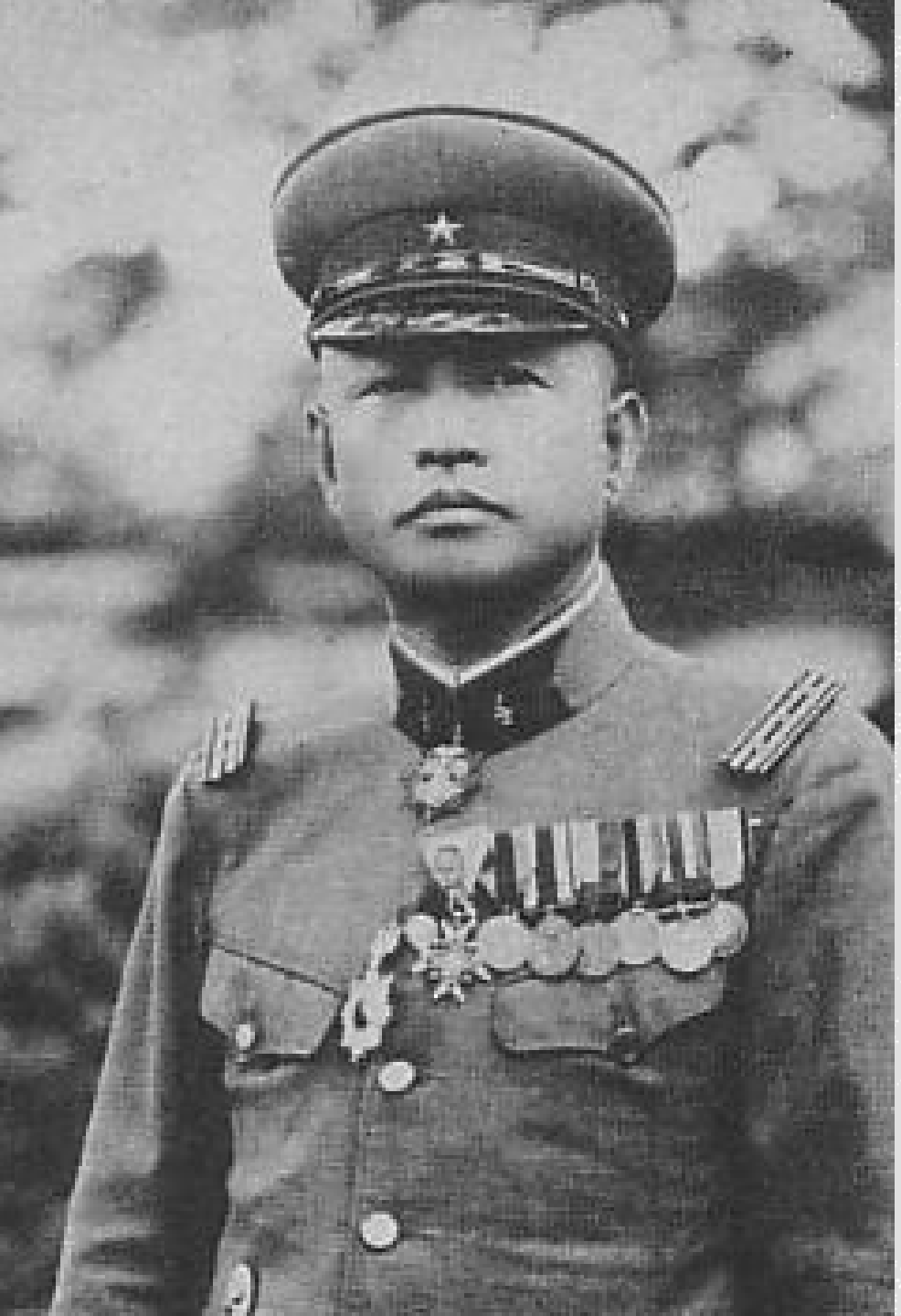
中国＋米国＋英国＋…

④問題の所在

日本はなぜ、中国と戦争したのか？
＝　基本的には以下の図式

軍部の暴走　＋　国民からの支持

以下、「軍部の暴走」と「国民からの支持」の要因を探ることで、戦争をする国の作られ方について明らかにする。



2、なぜ軍部は「暴走」したのか？

①「満蒙」への執着

・1928年6月、中国奉天軍閥の張作霖を列車爆破によって暗殺。

・1931年9月、関東軍の謀略で、満鉄線路を爆破。中国軍のしわざと偽って中国を攻撃。

→関東軍は中国を攻撃し、「満州」を「独立」させることを目指した謀略作戦をくりかえす。

＊中心人物としての**石原莞爾**（関東軍参謀）

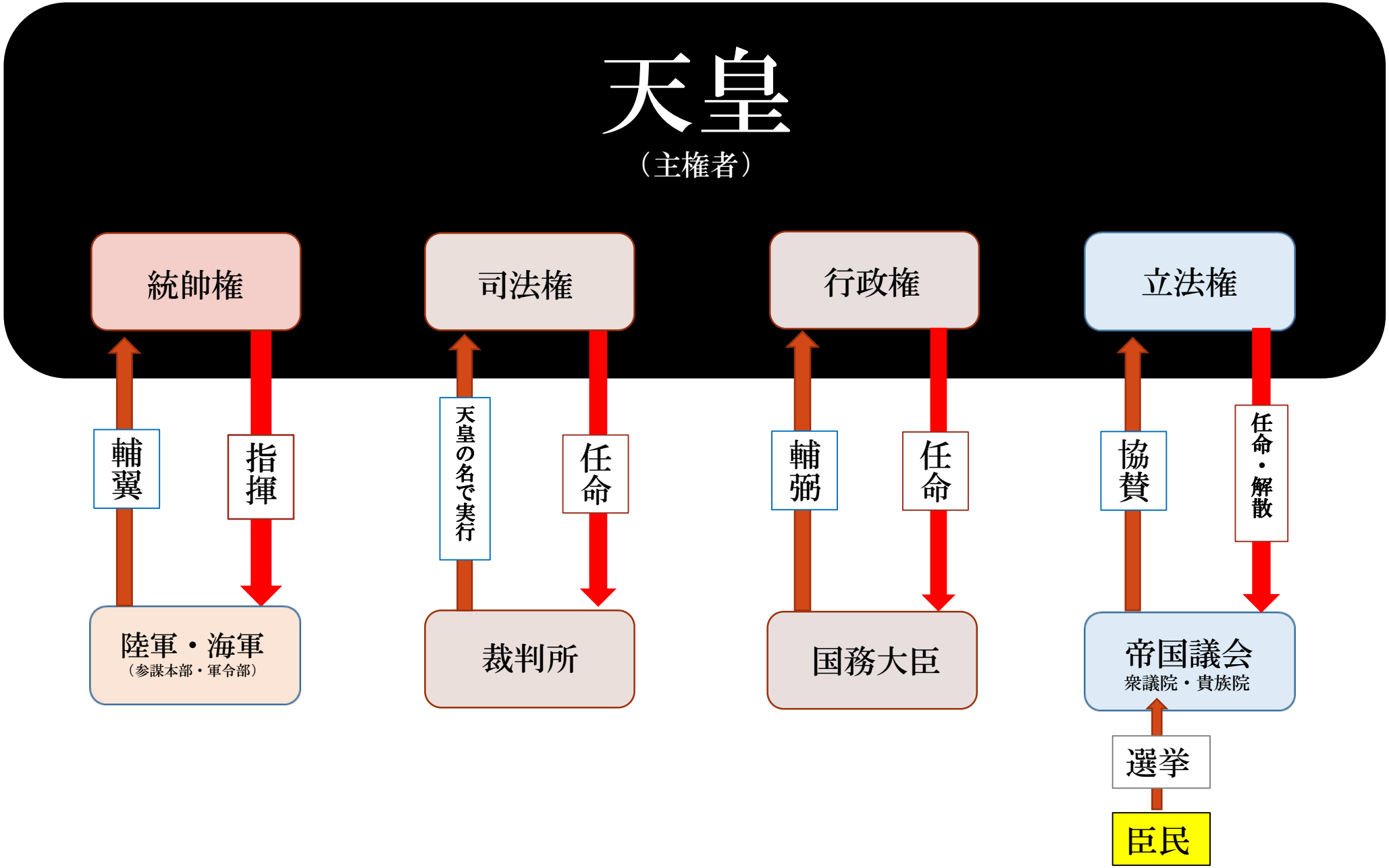
近い将来に世界の中心が日本か米国かを決定する人類最後の世界大戦が勃発する、という「世界最終戦論」を唱え、これに備えるために、**地下資源（鉄鉱石・石炭など）の獲得基地**として、「満蒙」を日本の領土にする必要があると考えた。

②大日本帝国憲法の矛盾

＊軍部の暴走を、政府は制度的に止めることができない。

大日本帝国憲法（明治憲法）においては、政府と軍部は天皇に対してのみ責任を負い、相互には負わない。

（国務と統帥の分離／統帥権の独立）


天皇
（主権者）
統帥権
司法権
行政権
立法権
輔翼
指揮
天皇の名で実行
任命
輔弼
任命
協賛
任命・解散
陸軍・海軍
（参謀本部・軍令部）
裁判所
国務大臣
帝国議会
衆議院・貴族院
選挙
臣民

③海軍のセクショナリズム

- 陸軍を中心とする「暴走」だけでなく、海軍も中国侵略を積極的に推進。ソ連との戦争を第一に掲げる陸軍に対し、海軍は対米戦軍備の優先を主張して、軍拡を進めていく。

「事変の存在は、急速な軍備の実行を可能にした。〔中略〕これは平時体制の下であったならば、国内、国外ともに異常な刺激を呼んだことであったろうと思われる。**支那事変は計画軍備の実施および出師準備作業に隠れ蓑の役をもって寄与した。**」

（日本海軍航空史編纂委員会編『日本海軍航空史（４）戦史篇』時事通信社1969年）

＊海軍の組織的利害で、国策が左右されたことも重要な事実。

伏見宮博恭軍令部総長

④新聞報道の限界

- **張作霖爆殺事件（1928年）**

中国の新聞や外国の新聞は、事件の背後に日本陸軍がいると報道。日本国内では、関東軍の「新聞の掲載記事検閲を励行」せよという要望により情報統制がなされ、新聞は「南軍便衣隊の仕業」と報道。

→　張作霖爆殺事件も柳条湖事件も真相を民衆が知ったのは、戦後になってから。

- **新聞紙法（1909年）第27条**

陸軍大臣、海軍大臣及外務大臣ハ新聞紙ニ対シ命令ヲ以テ軍事若ハ外交ニ関スル事項ノ掲載ヲ禁止シ又ハ制限スルコトヲ得。

→　日中戦争で全面展開

昭和三年六月五日（火曜日）　THE TOKYO ASAHI SHIMBUN　第一萬五千百千號（一）

張氏の列車爆破さる

張作霖氏始め負傷多數

滿鐵陸橋も破壞さる

【奉天特派員四日發】四日午前五時半頃張作霖氏の乘つた特別列車が滿鐵奉天驛を距る一キロの滿鐵線の陸橋下の京奉線をはく進中突然ガラ然と爆發が發聲し滿鐵の陸橋は爆破され進行中の張氏の特別列車の貴賓車および客車三台破壞され一台は火災を起し機關車も目下燃えつゝあり我守備軍および警官出張中である

【奉天特派員四日發】張作霖氏は無事危難を免れ瀋陽御所から自動車にて城内の私邸に歸つたが負傷して居る模樣である負傷者は可なり多數に上り苦しいうめき聲を立てゝ救ひを求めて居る列車中の負傷者は乘込中の支那兵士が運びだしたが付近通行中の支那人で負傷したものも相當あり自轉車等繰りに飛び付近民家の窓ガラス等全部破壞されて居る

張作霖氏は顔面に微傷

一時は人事不省に陷る

同車の吳俊陞氏も負傷

【奉天特派員四日發】張作霖氏は緊急隊氏並に軍事顧問陸軍少佐は御一の貴賓車に乘込んでゐたが爆發のため客車は大破されたるも幸にも生命を拾ひ微傷を受けたのみであつた、張氏は鼻柱に負傷し一時人事不省に陷つたので直に護衛兵が抱へ下して手當を加へ蘇生せしめて折柄奉天驛中の日本軍駐屯所に伴れ込まんとしてゐたところへ支部側の憲兵司令の自動車が折よく來かゝつたのでこれに乘せて城内の官邸に送り屆けた當時護衛兵は張氏をかばうやうにして一時めくら滅法に方向を定めず發砲したが警備中のわが兵は應戰しなかつた、尚張氏少佐は今回の事件をもつて南軍便衣隊の仕業であることを理由を擧げて說明した、張氏と同車中負傷した主なる人々は平國銀行部に負傷吳俊陞、陳廣霖氏等である

怖るべき破壞力を有する

強力なる爆藥を埋設

南軍便衣隊の所業か

怪しき支那人捕はる

【奉天特派員四日發】特別列車爆破に先立ち三日午後十一時頃滿鐵奉天驛のクロス點付近を怪しき支那人二名が徘徊して居るので折柄警備中の我獨立守備隊東宮大尉の部下がある何した所矢庭に逃走を企てたので追跡して調べた所懷中には二通の國民革命軍のしるしある手紙を所持してゐた、その中には張作霖氏の奉天驛着列車の時間等が記されてあつた事實あり又爆發現場の怪んたんたる事實から見て埋設してあつた爆藥を南軍便衣隊が張作霖氏の乘込んで居る列車の進行し來るを見計らつて爆發させたものらしくその破壞力偉大な所は到底投げつけた爆彈のおよぶところでない

列車は無殘に粉碎され

慘たんたる爆破の現場

滿鐵、京奉兩線不通

【奉天特派員四日發】[illegible]は無殘にも破壞されて輝りに盛上りレールはあめのやうになつてガード下の京奉線にすれ〳〵に落れ下り[illegible]は木葉微塵となり二台はいづれも大破[illegible]

[illegible]

日中には復舊する見込が立つた

張作霖氏遭難の地點（奉天驛クロス點下の京奉線）

孫軍殺到の情報に

大混亂の天津市街

日拔の商館閉店して

右往左往の避難民

城内刻々危險迫る

住民に全部引揚命令を發し目下引揚中、[illegible]

[illegible]

境界の

[illegible]

④新聞報道の限界

- 白虹事件（1918年）

1918年『大阪朝日新聞』が政府権力と対立して存亡の危機に追込まれた日本の新聞史上最大の筆禍事件。当時，『大阪朝日』は，シベリア出兵，米騒動などに関連して寺内内閣を弾劾する言論の一大拠点であった。8月 26日付け夕刊の記事に兵乱の前兆をいう「白虹日を貫けり」の一句があったことが，新聞紙法第 41条（安寧秩序紊乱）に違反するとして『大阪朝日』は告訴され，村山竜平社長は退陣，次いで鳥居素川，長谷川如是閑をはじめ，大山郁夫，丸山幹治，花田大五郎らも社を去った。同紙がこの事件で「不偏不党公平穏健」に反する傾向があったと自己批判したことは，その後の日本の新聞のあり方に象徴的な影を落している。（ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典）

→　**自主規制の状態化／戦争報道で部数伸長**

⇒　商業マスメディアが抱えつづける問題

３、なぜ国民は戦争を支持したのか？

①経済的な苦境（その１）

戦前日本　＝　米・英に深く依存する体制

・鉄・石油・工作機械類などをアメリカ、イギリスから輸入。

・生糸・綿製品をアメリカ、イギリス領植民地に輸出して外貨を獲得。

→　生糸輸出85～95％は対アメリカ

（生糸は奢侈品の原料。化学繊維への代替進行）

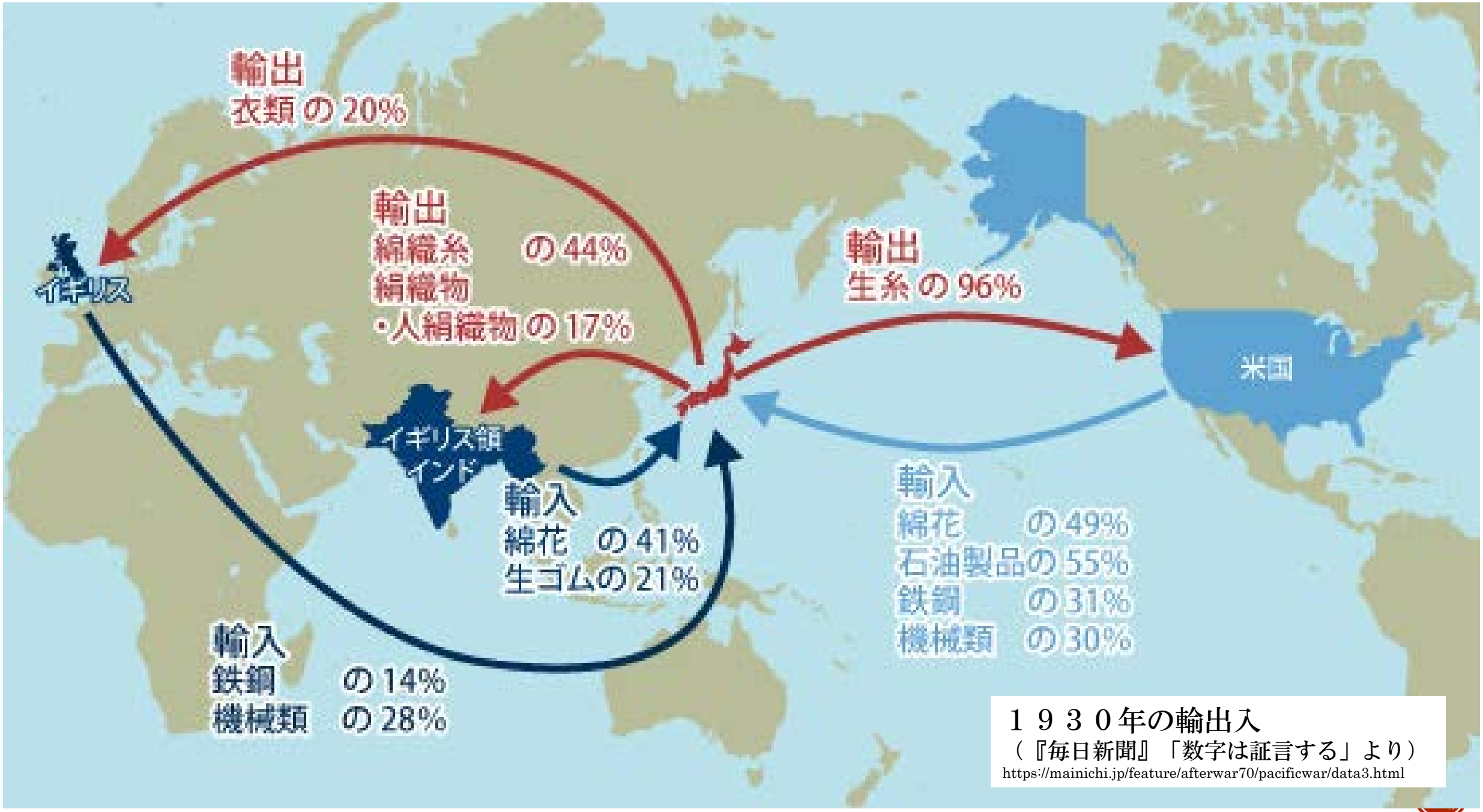
→　国家財政もアメリカ、イギリスの外債に依存。

1923～30年の外債15億8300万円のうち、10億3700万円が米国

5億4600万円が英国。

⇒　日本は米・英に深く依存する、脆弱な経済体制の下にあった。

参考文献：江口圭一『十五年戦争小史』（青木書店、1991年）



１９３０年の輸出入
（『毎日新聞』「数字は証言する」より）
https://mainichi.jp/feature/afterwar70/pacificwar/data3.html

①経済的な苦境（その２）

＊昭和恐慌と茨城

・農産物価格の下落

	1929	1930	1932
米価（1石）	30円台	18円	
繭価（1貫）	7.57円	→	2.54円

⇒　茨城県の農業を直撃　→飢餓
だが県の収繭量は増大
1929：100　→　1933：141
収量を増やして苦境を抜け出そうとする状況。
結果として商業的農業は挫折。小作地増大。

⇒　米・英に経済的に依存してきた矛盾が露呈。

①経済的な苦境（その３）

＊五・一五事件

1932.5.15　海軍・陸軍の青年将校＋茨城の農民決死隊によるテロ。

首相官邸、警視庁、日本銀行、内大臣官邸、政友会本部を襲撃し、犬養毅首相等を暗殺。

農民決死隊は変電所6ヶ所を襲撃し、「**帝都を暗黒にする**」ことをねらうも、失敗。

なぜ、彼らは決起したのか？

＊農村の窮乏＋腐敗した「政党政府」や私利を追い求める「財閥」への憤り

＊被告に対する減刑嘆願運動

1933年10月末までに、嘆願書は69万7044通。うち血書は1022通、内訳は東京31万3635通、大阪府1万456通、茨城県1万1666通など。

②中国への憎悪の拡大

- 1932年「満洲国」建国　→　国際連盟で孤立　→　連盟脱退

　中国が国際連盟を味方につけて、日本人を傷つけ、その正当な権益を脅かしている、という認識が拡大。

「支那の悪い兵隊は日本人を満州から追出さうとして、ひどい目に合はせるとは何と言ふ乱暴な人達でせう。この大切な満州を大和魂でかたまった強い強い兵隊さん、どうぞしっかり守って下さい」（大津市・小学校五年生・男子）

cf. ７３１部隊の人体実験。

③「近衛ポピュリズム」の形成

- **近衛文麿**の組閣（1937.6）

  名門華族の嫡男／京都帝大卒業／「革新」的思想

  対外方針：単純なる現状維持に非ざる真の平和

  国内政策：社会正義に基づく施設

⇒　「反既成政党」「反財界」のムードのなかで、民衆から絶大な人気を得る

⇒　1938.12　第三次近衛声明

日中戦争によって中国の独立を実現する、帝国主義的な国家間の戦争とは全く異なると主張。侵略戦争を「聖戦」化する。

⇒　すべての政党の解散、新体制へ。政党不信の中で「バスに乗り遅れるな」。

④社会大衆党の解党

- 社会大衆党＝労働運動・農民運動の基盤を置く無産政党の最大勢力（議席数：37）。
- 日中戦争＝「国体の本義に基く日本内部の資本主義制度を改革して全体主義の制度を建設するための国家革新的意義を有する戦争」と認識（麻生久『現代戦争の意義』）。
- 1940年6月に近衛が新体制運動に乗り出すと、翌月他党に先立って解党。大政翼賛会に参加。

⇒民主主義を犠牲にして社会革新をめざす。

総力戦＝社会革新の幻惑

まとめ①　なぜこうなったか

①民主的規定が極めて制約された憲法

→　シビリアンコントロールの効かない軍隊

→　軍部の暴走

→　言論の自由の封殺／市民社会の幅の狭さ

②マスメディアの統制・自主規制

③政治腐敗と「まっとうな選択肢」の欠如

→　テロリズムへの傾斜／侵略戦争への支持

→　総力戦による（一足飛びの）社会革新の幻惑

まとめ②　再び戦争をしないために

①「戦争を支持した国民」を考える視点

「民衆の“軍国主義”とは民衆の素朴な夢のゆがめられた表現である。その押しひしがれ、ねじ曲げられた願望のうちに発展の芽があることを知らない者に革命を語る資格はない」（谷川雁『原点が存在する』弘文堂、1958年）。

→　「小池新党」の席巻から挫折までの過程を改めて考える

②「民主主義社会」をつくりつづける

「私はデモに行くようになってから、デモに関していろいろ質問を受けるようになりました。それらはほとんど否定的な疑問です。たとえば、「デモをして社会を変えられるのか」というような質問です。それに対して、私はこのように答えます。デモをすることによって社会を変えることは、確実にできる。なぜなら、デモをすることによって、日本の社会は、人がデモをする社会に変わるからです。」（2011.9.11柄谷行人）

→　現状への憤りを媒介する場を社会につくりつづける

参考文献

- 江口圭一『十五年戦争小史』（青木書店、1991年）
- 山田朗『大元帥昭和天皇』（新日本出版社、1994年）
- 吉見義明『草の根のファシズム』（東京大学出版会、1987年）
- 家永三郎『太平洋戦争』（岩波現代文庫、2002年）
- 粟屋憲太郎『昭和の歴史⑥　昭和の政党』（新装版、小学館ライブラリー、1994年）
- 有馬学『日本の歴史23　帝国の昭和』（小学館、2002年）
- 笠原十九司『日中全面戦争』（上・下、高文研、2017年）